



# いろいろな思い込みが破壊されて

## 友人に読んでもらいたい!!

今回、友人や知り合いに紹介することをイメージして書いてもらえればうれしいです！と原稿の依頼を受け、自身でも張り切ってお受けしましたが、いざ書くとなると、とても難しいものでした。

たとえば、たくさんの字がバババ...と並んでいる



石坂 清太郎  
パプアニューギニアの青年と

紙面を想像するだけでも、とても自分の友人や知り合いに紹介できるものには...と(笑)。もし、フェイスブックなどのSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)で、四千字にもなる投稿があったら、正直、自分なら読まないかもしれません。

それでも、なるべく友人や知り合いに読んでいただけるようなものになれば、と思います。わたしが一番伝えたいことは、**教会とは格式が高く形式的で仰々しいものではなく、とてもカジュアルなものである**ということ。誤解を生まないために一応言っておくと、すべてがカジュアルではありません。私が、あくまで、いろいろな人が行き来する場所、多くの人の居場所となっているという意味では、教会は、人の生活に根づき、存在しているものなのです。そこに堅苦しさはないはず。教会だけでなく、信仰をもつこともまた堅苦しいもの、仰々しいものではないと思います。

神様はこれまでさまざまな経験をとおして、わたしにそのことを伝えてくださった、と確信しています。

## ミャンマーのクリスチャンと出会う

救世軍士官(伝道者)の両親のもとに生まれたわたしは、両親の赴任先である、大阪、北海道、東京と移り住み、今に至っています。わたしの両親が赴任した小隊(教会にあたる)が、自分の住まいでしたから、信仰はいたって自然な環境で育ちました。

そのため、信仰をもつ決断というような経験が、自分の中では非常に曖昧です。思い返しても、信仰をもつにいたる特定の出来事をはっきり思い出せません。

しかし、そんなわたしが、だんだんと教会が自分の居場所である、と意識し、自分がクリスチャンであるという自覚をもつようになったのは、大学時代のタイとミャンマーにおける研究、教育支援活動がきっかけだったと思います。

キリスト教主義の大学に進学したわたしは、国際的な支援について学びました。その研究の一環で、ミャンマーYMCAの青年と共に活動する機会が与えられました。タイやミャンマーは国民の大半が仏教徒の国で、

共通して敬虔な仏教徒が他国に比べて多いことが特徴です。

そんな中、両国において、非常に数少ないミャンマーのクリスチャンと活動する、という貴重な体験をすることができました。

彼らの一日の生活において、特に、ことあるごとに祈禱会や聖書の学び会が頻繁にある、というわけではありませんでした。けれども、個人で簡単な祈りをしていたり、さらっと信仰の話をしていたり、と信仰が生活の一部に溶け込んでいました。そこにはまったく堅苦しさがなく、お祈りは静かなところでやらなきゃいけない、聖書はちゃんと読まなきゃいけない、といった、自分の中にあった(クリスチャンとしてやるべきこと)の思い込みが破壊されました。

ミャンマーのクリスチャンたちが、大半の人が無宗教である日本人に対して、「君らの信じているものはどうかかわからないけど、神様にとりあえず相談すると神様がいろんな形でアド



北海道時代。家族と(左から2人目)

「なんでそんなクリスチャンでいることが大変だと思ってるの? わたしたちにとつての生活の一部でしょ。そんな堅苦しくする必要ないでしょ」と、神様とちょっと気軽に向き合えばよいことを教えられました。

その出会いから、自分がクリスチャンであるために課すハードルが低くなり、神様をより信頼できるようになったと思います。

## UNBOUND(解放)!

ちょうど、今年五月に、救世軍で青年の行事がおこなわれました。今年は、アメリカの救世軍から、ギターバンドの編成で神様を賛美しながら伝道活動をしている、UNBOUNDというグループが来日しました。また、日本の周辺の国々、韓国、台湾、香港、インドネシア、フィリピン、パプアニューギニア、ニュージーランド、オーストラリアからも青年たちが参加しました。

にお祈りを始めたバプアニューギニアの青年や、スペイン語と英語がごちゃ混ぜになったお祈りをするUNBOUNDのメンバーの姿、またコンテンポラリーダンスでの賛美など、それぞれがそれぞれのスタイルで神様とのコミュニケーションをとることができました。そして、知らず知らずのうち



UNBOUNDの演奏に心が解放されました。わたしの好きな聖書の言葉は、「わたしを呼べ。わたしはあなたに答え、あなたの知らない隠された大いなることを告げ知らせる」(エレミヤ書33章3節)英語では、「呼べ」が「Call」と書かれていて、電話で話せるような気軽さを感じました。

ちに自分の中に固定化していた「こうあるべき」というものから、解放されました。自分も神様との関係をつくっていくのに、もっとカジュアルでいいんだ、という気づきを与えられました。

その気づきが与えられてからは、お祈りは声を出してする必要もないし、いつでもできるじゃん! という「大発見」が与えられたのです(笑)。

## ものすごいパワーの源は、祈り

本気で大発見と思うほど、自分の考えはかなり固定化されていたんだと思わされています。今、社会人二年目として経営コンサルティンクの会社で勤めています。株式会社であるため、当然のことながら成果や利益など株主への説明責任が重要視され、毎日さまざまなチャレンジがあり刺激的な日々を過ごしています。

大発見以来、仕事に取りかかる前には、パソコンを前にして自然と短いお祈りをするのができるようになりました。

それは、明確な言葉での祈りではなく、一瞬神様に時間を渡すような感覚です。すると、本当にそれがなにか、自分でもよくわからな

いのですが、安心感につながっています。このことは、自分にとつてもものすごいパワーとなっていて、頭がすっきり整理されます。今、かなりハードなスケジュールで仕事をこなさなければならぬ中にあるのですが、今までに経験したことのないほど、仕事が順調に進み、結果、残業代が入らずに、給料がかなり減ってしまっただけです(笑)。

お祈りは、決まった時に決まった形でするものではないことが、よくわかりました。本当に自然でいいんだ、と。学生時代に出会ったミャンマーのクリスチャンがやっていたこと、言っていたことが、自分にもよくわかりました。

## 常に神様に問いかけながら

ビジネスの世界はともハードな世界ですが、その中で神様と常に対話しながら仕事をしていきたいと思っています。

経営コンサルタントとして働く中で、お客様に対して常に正しくいること、目の前の「小さな」成果、利益に動かされるのではなく、本気でお客さんを正しい姿へ導いていけるような仕事をしたい、と感じています。

祈りを通して、神様から知恵を与えてもらいながら良い仕事をしていきたいです。

現在の上司はクリスチャンではありませんが、お客様や仕事で与えられた課題に対し、とても誠実に向き合っており、仕事をされています。周りからの信頼が厚く、その人と仕事をするとなぜか良い方向に動き出します。

その方は、うまいことを言っただけで何となく成果を出すことを、とことん嫌っています。その方の仕

事への向き合い方を通し、一つ一つの仕事に対して誠実さや正しさをもちつことがいかに重要か、を神様は教えてくださっていると思います。わたしは、その方には到底及びませんが、常に神様に問いかけることで、正しさ、誠実さを携えて仕事をしたいと思っています。一緒に仕事している同僚やお客様に、自分がクリスチャンであることをはっきりと伝えていくわけではないので非常に窮屈に感じることがあります。しかし、自分が神様に強められながら働く中で神様の力が同僚またお客様に働くようになれば、と期待しています。

(救世軍杉並小隊・信徒)

私の近くの救世軍を紹介してください。  
キリスト教についてもつと知りたいたいです。  
『ときのことえ』の購読を申し込みます。

ご住所  
ご氏名  
ご住所

アンバウンド CD 販売中!  
UNBOUNDのCD販売中!  
写真は、「FOR THE KING」  
価格1000円(税込み)ご注文は救世軍  
出版供給部まで。TEL03-3237-0881

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の救世軍にお送りください。



5月に開催された、青年の行事で